

### 第3章 東部における選挙

著者	佐藤 創
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
シリーズタイトル	情勢分析レポート
シリーズ番号	23
雑誌名	インドの第16次連邦下院選挙：ナレンドラ・モデ ィ・インド人民党政権の成立
ページ	47-67
発行年	2015
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	<a href="http://doi.org/10.20561/00030854">http://doi.org/10.20561/00030854</a>

## 第3章

# 東部における選挙

佐藤 創

本章では、東部主要5州（アッサム、西ベンガル、ジャールカンド、オディシヤ、チャットーイスガル）と北東諸州（アルナーチャル・プラデーシュ、ナガランド、メガラヤ、マニプル、ミゾラム、トリプラ、シッキム）の選挙の概要と結果を簡単にまとめる。本章の対象とする州の連邦下院議席数は、西ベンガルの42議席がひととき多く、次いでオディシヤが21議席であり、アッサムとジャールカンドがそれぞれ14議席、チャットーイスガルが11議席、北東諸州の合計が11議席となっており、合計で113議席である。

このうち今回の選挙では、インド人民党（BJP）が前回2009年の23議席から10議席増やして33議席、国民会議派（会議派）は2009年の27議席から14議席減らして13議席という結果となった。また、BJPと会議派いずれとも選

表 3.1 東部主要5州の基礎情報

	人口 (人)	一人当たり SDP (2013年度) (ルピー)	一人当たり SDP年平均 成長率 (2004-2013 年度) (%)	都市人口 比率 (%)	指定カースト (SCs) 比率 (%)	指定部族 (STs) 比率 (%)	識字率 (%)	男性 (%)	女性 (%)
アッサム	31,205,576	24,533	4.3	14.1	7.2	12.4	72.2	77.8	66.3
西ベンガル	91,276,115	37,511	5.8	31.9	23.5	5.8	76.3	81.7	70.5
ジャールカンド	32,988,134	30,091	5.5	24.0	12.1	26.2	66.4	76.8	55.4
オディシヤ	41,974,218	25,891	4.3	16.7	17.1	22.8	72.9	81.6	64.0
チャットーイスガル	25,545,198	28,708	5.0	23.2	12.8	30.6	70.3	80.3	60.2
全インド・全インド平均	1,210,569,573	39,961	5.8	31.2	16.6	8.6	73.0	80.9	64.6

(出所) GOI (Government of India) (2013) Census of India 2011, Primary Census Abstract Data Highlights, India Series 1; GOI, およびGOI MOSPI (Ministry of Statistics and Programme Implementation), CSO (Central Statistics Office) のSDPに関するデータ ([http://mospi.nic.in/Mospi\\_New/site/inner.aspx?status=3&menu\\_id=82](http://mospi.nic.in/Mospi_New/site/inner.aspx?status=3&menu_id=82)) より作成。

(注) 一人当たりSDPは2004/05固定価格。

挙協力をしなかった地域政党が躍進した州もあり、オディシヤではビジュー・ジャナター・ダルが20議席（前回2009年選挙より6議席アップ）、西ベンガルでは全インド草の根会議派（AITC）が34議席（15議席アップ）を得ている。

## 1. オディシヤ州：ビジュー・ジャナター・ダルの大勝

オディシヤ州はベンガル湾に臨む東部の沿岸地域と、天然資源に恵まれた西部の丘陵地帯からなる。2011年のセンサスによると人口は4197万人であり、識字率は72.9%、都市人口比率は16.7%、指定部族（STs）の人口比は22.8%、指定カースト（SCs）は17.1%である（表3.1）<sup>(1)</sup>。全インド平均に対して、都市人口比率が低いこと、STsの人口比が高いことが特徴であり、少数民族はおもに西部の丘陵地域に居住している。なお、2001年のセンサスでは、宗教別の人口構成は、ヒンドゥー教徒が94.4%と大多数を占め、そのほかキリスト教徒、イスラーム教徒がそれぞれ2.4%、2.1%であり、オリヤー語を話す人口が8割を超えていた。経済的な側面に注目すると、オディシヤはいまだ貧しい州である。2013年度の一人当たり純州内生産（Net State Domestic Products: Net SDP）は2万5891ルピーであり、全国平均の3万9961ルピーの6割強しかない。また2004年度から2013年度までの一人当たりSDPの年平均成長率は4.3%であり、この値も全インド平均の5.8%を相当程度下回っている。

オディシヤ州の連邦下院議員定数は21であり、そのうちSTs、SCsの留保議席はそれぞれ5議席、3議席である。1980年から1990年まで、1995年から1999年まで州政権を担当した会議派J.B.パトナイクは国民会議派中央政府との強い関係を基礎に開発を進める手法をとり、1990年から1995年まで州政権の座にあったジャナター・ダルのビジュー・パトナイクは州の自立を訴え支持を得た。また、BJPは1990年代に入って西部のSTsに徐々に支持を広げていた。オディシヤ州ではこの3党が主たる政党である。1997年にビジューが死去し危機に陥ったジャナター・ダルは、BJPと協力し会議派と対決する方針を採用し、これに反対する中央のジャナター・ダルと手を切って地域政党ビジュー・ジャナター・ダルを結成した。2000年の州選挙にビジュー・ジャナター・ダルは勝利し、それ以来、党首ナヴィーン・パトナイクが州首相を3期務めてい

表 3.2 オディシャ州の連邦下院および州議会選挙結果

連邦下院選挙結果 (定数 21)	1999		2004		2009		2014	
有権者数 (人)	24,187,490		25,651,989		27,194,864		29,196,041	
投票率 (%)	55.6		66.1		65.3		73.8	
	議席数	得票率 (%)	議席数	得票率 (%)	議席数	得票率 (%)	議席数	得票率 (%)
ビजू・ジャナター・ダル	10	33.0	11	30.0	14	37.2	20	44.1
BJP	9	24.6	7	19.3	0	16.9	1	21.5
会議派	2	36.9	2	40.4	6	32.8	0	26.0
その他	0		1		1		0	
	2000		2004		2009		2014	
州議会選挙結果 (定数 147)	議席数	得票率 (%)	議席数	得票率 (%)	議席数	得票率 (%)	議席数	得票率 (%)
ビजू・ジャナター・ダル	68	29.4	61	27.4	103	38.9	117	43.4
BJP	38	18.2	32	17.1	6	15.1	10	18.0
会議派	26	33.8	38	34.8	27	29.1	16	25.7
その他	5		8		5		4	

(出所) Election Commission of India ウェブサイトのデータ, 吉田 (2001; 2006a) および上田ほか (2011) を参照して作成。

る状況にあった。

ビजू・ジャナター・ダルとBJPの選挙協力は1998年から2009年まで続いていたが、BJP系のヒन्दゥー主義の団体が深刻な宗派暴動を引き起こしたことを主たる要因として2009年の選挙前に訣別しており、2009年の総選挙時と同様に今回も主要3党は三つ巴の選挙戦となった。なおオディシャでは連邦下院と州議会は同時に選挙が行われた。ビजू・ジャナター・ダルは、2009年以降は中央の会議派率いる統一進歩連合 (UPA) 政権に対する批判を強めており、また会議派をはじめとする他党の連邦下院議員および州議会議員を何人か迎え入れ、勝利は手堅いものと考えていた。それに対して、会議派は州の党組織弱体化の立て直しに失敗しており積極的な選挙を展開できず、BJPはモディ人気に依存した選挙戦であり、とくに投票日直前にはモディ・ウェーブの広まりにビजू・ジャナター・ダルも警戒を強めていた。

連邦下院選挙では定数21のうち、ビजू・ジャナター・ダルが20議席、得票率で44.1%と圧勝をおさめた (表3.2)。BJPは得票率を5%ポイントほど伸ばし21.5%、大臣経験をもつなど経験豊富な候補者が1議席を得た。会議派は

得票率こそBJPを上回ったものの（26.0%）、1議席も得られず惨敗した。同時に行われた州議会選挙でも、定数147のうち、ビジュー・ジャナター・ダルが117議席、会議派が16議席、BJPが10議席をそれぞれ獲得する結果となり、こちらでもビジュー・ジャナター・ダルが圧勝し、BJPが議席を4つ積み増し、会議派が11議席減らした。

このようにオディシャではBJPは若干伸長したものの、ビジュー・ジャナター・ダルが一党支配を強める結果となり、ナヴィーンは州首相4期目を務めることとなった。州政権を担い始めた2000年から今回の選挙に至るまで経済の発展には功績を挙げたとは言い難い状況にあり、鉱工業開発をめぐっては対象地域の住民（STsを多く含む）の立ち退き問題が社会問題化しているにもかかわらず、ビジュー・ジャナター・ダルが上位カースト層を含む広い社会階層から支持を受けて勝利した理由としては以下のような要因が考えられる。ナヴィーンの清廉なイメージ、経済の後進性に関する不満を中央政府に振り向けてオディシャの自立を訴えるなど会議派の中央政権との対立姿勢を次第に強めていたこと、女性およびSTs、貧困層への所得再分配政策に取り組み、また巧みにアピールしてきたことなどである。ただし、大勝したとはいえビジュー・ジャナター・ダルの州政権は、中央で成立したBJP政権と今後どのような関係を築くのか苦慮する可能性がある。

## 2. ジャールカンド州：BJPが議席を積み増す

ジャールカンドは2000年にビハールから分離して創設された比較的新しい州で、北にビハール、東に西ベンガル、南はオディシャに接した内陸州である<sup>(2)</sup>。鉄鉱石などの天然資源が豊富であり、タタ・スチールの本拠地ジャムシェドプルがある。また部族民が多く暮らす森林地帯ではナクサライトと呼ばれる極左武装団体の活動が活発である。2011年のセンサスではジャールカンドの人口は3299万人であり、そのうちSCsは12.1%、STsは26.2%、都市人口比率は24.0%、識字率は66.4%であった（表3.1）。STsの人口比が高いこと、識字率が低いことが顕著である。2001年のセンサスではムスリムが13.8%、4.1%がクリスチャンであった。経済面では、2013年度の一人当たりSDPは3万91

ルピーであり、その2004年度からの平均成長率は5.5%であった。成長率は全インド平均とさほど変わらなかったが、一人当たりSDPは全インド平均よりまだ低い状況にある。

ジャールカンド州の連邦下院議員定数は14であり、そのうちSCsの留保議席が1、STsの留保議席が5である。ジャールカンドの創設を最終的に推進し実現することに大きな役割を果たした政党はBJPであった。もともとはビハール、西ベンガル、オディシヤ、マディヤ・プラデーシュに広がる高原地域をジャールカンド州として独自の州とするという要求を少数民族が訴えていたが、ビハール州南部の天然資源があり鉱工業の展開している地域を貧しいビハール北部から切り離す運動が活発となった。これを担ったジャールカンド解放戦線(JMM)が汚職問題で1990年代後半に勢力を失い、その間隙を埋めてBJPが州議席を徐々に増やし、さらにBJP率いる国民民主連合(NDA)政府が中央で政権につくと、2000年にジャールカンド州がビハール州から分離して成立した。

しかし、州創設後に州政権を担ったNDA内でBJPとジャナター・ダル(統一派)(JD(U))が対立し選挙協力が行われなかったこともあり、BJPは2004年連邦下院選挙でUPAに大敗し、以降、2005年州議会選挙、2009年州議会選挙といずれの政党も安定多数を獲得できなかった。それゆえ、州首相が頻繁に交替して大統領統治になるなどの事態もあった。実に、州創設から13年のあいだに政権交代が9回、大統領統治が3年あり、州政府の不安定さを反映している。連邦下院選挙については2009年時には、BJPはJD(U)と選挙協力を行い8議席を獲得、選挙協力で失敗したUPAは、JMMが2、会議派が1議席であった。今回の連邦下院選挙時にはJMM党首シブ・ソレンの息子であるヘマント・ソレンがJMM、会議派、民族ジャナター・ダル(RJD)の連立で州政権を担っていた。

ジャールカンド州でも電力や鉱業部門で外国直接投資招致の試みが積極的に追及されてきたものの、土地収奪と強制移住が政治的問題となり、政府や大企業により企画されている開発プロジェクトへの反対運動が盛んである。また、ナクサライトの活動地域でもある。企業誘致活動の維持促進を視野に入れているBJPと会議派はいずれも土地収奪や強制移住の問題は争点化しないように選挙戦を展開した。BJPはここでは開発は必ずしもポジティブな意味とならないため、グジャラート・モデルという言葉はあまり使わず、モディのカリス

表 3.3 ジャールカンド州の連邦下院選挙結果

連邦下院選挙結果 (定数 14)	1999		2004		2009		2014	
有権者数 (人)	14,894,905		16,812,339		17,934,095		20,326,743	
投票率 (%)	51.8		55.7		50.9		63.9	
	議席数	得票率 (%)	議席数	得票率 (%)	議席数	得票率 (%)	議席数	得票率 (%)
BJP	11	45.5	1	33.0	8	27.5	12	40.1
ジャールカンド解放戦線 (JMM)	0	9.5	4	16.3	2	11.7	2	9.3
会議派	2	23.8	6	21.4	1	15.0	0	13.3
ジャールカンド開発戦線 (民主主義)	-	-	-	-	1	10.5	0	12.1
その他	1		3		2		0	

(出所) Election commission of Indiaウェブサイトのデータ、吉田 (2006b) および上田ほか (2011) を参照して作成。

(注) 1999年は州創立前の同地域に関する概算。

マ性に訴える手法を採用した。会議派はJMMと選挙協力し、STs出身で元州首相のバプラル・マランディがBJPから分かれて創設したジャールカンド開発戦線 (民主主義) は部族アイデンティティに訴えていた。結果はモディを前面に出したBJPが14議席のうち12議席を獲得し、投票率も40.1%に伸ばして圧勝した (表3.3)。対して会議派は得票率こそ微減であり13.3%であったものの議席は獲得できず、選挙協力したJMMが党首のシブ・ソレンなど2議席を獲得した。得票傾向をみると、ジャールカンド州では、中央および州政府を担っていた会議派とその友党への不満、つまり現職批判の傾向が強く、BJPは若年層、都市、上位カースト・ヒンドゥー、その他後進カースト、富裕層などの支持を集め、BJPが大勝した他州と同じ傾向を示している。ただし、ムスリム票の60%は会議派およびその友党が獲得し、BJPへ向かったのは9%のみである。BJPが中央レベルで政権を担当することになり、州の創設以来頻繁に交替して安定さを欠く状況が続き、かつ現在は会議派とJMMが支えている州政権にどのような影響があるか、州議会選挙が2014年末に予定されている。

### 3. チャットティースガル州：BJPが再び圧勝

チャットティースガル州は2000年にマディヤ・プラデーシュ州から分離して誕生した州で、2011年には、人口は2555万人であり、そのうちSCsは12.8%、

STsは30.6%，都市人口比率は23.2%，識字率は全体で70.3%であった（表3.1）<sup>(3)</sup>。STsの人口比が高く、とくに女性の識字率が低いという特徴がある。2001年のセンサスでは、ヒンドゥー教徒が94.7%とその比率が高く、またヒンディー語を話す人口が8割を超えていた。連邦下院議員定数は11であり、そのうちSCsの留保議席は1，STsの留保議席は4である。2013年度の一人当たりSDPは2万8708ルピーであり、その2004年度からの年平均成長率は5.0%であった。チャッティースガル州もまた全インド平均に比べて3割ほど平均所得が低いことがわかる。

チャッティースガルではBJPと会議派の2党が強くなり、地域政党があまり強くないという特徴がある。独立の州となって初めて行われた2003年の州議会選挙では、会議派州政権が腐敗などの理由で敗北し、BJPの政権が誕生した。2004年の連邦下院選挙でも同様に、BJPが11議席のうち10議席を獲得した。それ以来、州首相ラーマン・シンへの信頼があり、州議会選挙ではBJPと会議派の得票率に大きな差はないもののBJPが議席の過半数を2013年の選挙まで獲得し続けており、とくに連邦下院選挙ではBJPが圧勝してきた（表3.4）。なお、同州でもナクサライトの活動は活発で治安問題は深刻である。

今回の選挙では、州政権を担っているBJPは、中央政府もまたBJPの政権となれば、さらなる発展を約束すると主張して選挙戦を戦った。チャッティースガル・開発モデルを謳い、「1（モディ）+1（シン）=11」をスローガンに全11議席をとりに行くというものである。またナクサライト問題については会議派率いる中央政権が協力的でないとして責任をかわすレトリックを展開した。会議派は2013年の州議会選挙では全90議席のうち39を得て善戦したが、今回の連邦下院選挙では士気が低かった。結果は、投票率は69.5%と高く、今回も前回と同じくBJPが10議席、会議派が1議席を獲得した。前回の連邦下院議員選挙と比べると、BJPは得票率でおおよそ3.7%ポイント増やしたのに対し、会議派も1.1%ポイント得票率を増やしている。興味深いことに、BJPが獲得した票の特徴は貧困層・社会的弱者層や農村で比率が高く、他方で、会議派は若年層、都市でBJP以上に得票しており、他州と異なる様相をみせている。会議派率いる中央政府が実施した全国農村雇用保証法などの貧困層向けの諸施策について、現場では州政府が実施するという事情もあり、州政府およびBJPのポイントにすることに成功していたと考えられる。



表 3.4 チャッティースガルの連邦下院および州議会選挙結果

連邦下院選挙結果 (定数 11)	1999		2004		2009		2014	
有権者数 (人)	12,230,305		13,719,442		15,466,821		17,623,049	
投票率 (%)	55.3		52.1		55.3		69.5	
	議席数	得票率 (%)	議席数	得票率 (%)	議席数	得票率 (%)	議席数	得票率 (%)
BJP	8	47.9	10	47.8	10	45.0	10	48.7
会議派	3	43.4	1	40.2	1	37.3	1	38.4
	1998		2003		2008		2013	
州議会選挙結果 (定数 90)	議席数	得票率 (%)	議席数	得票率 (%)	議席数	得票率 (%)	議席数	得票率 (%)
BJP	36	40.1	50	39.3	50	40.3	49	41.0
会議派	48	40.6	37	36.7	38	38.6	39	40.3
その他	-		3		2		2	

(出所) Election Commission of India ウェブサイトのデータ, 上田 (2006) および 上田ほか (2011) より作成。

(注) 1999 年は州創立前の同地域に関する概算。

#### 4. 西ベンガル州：全インド草の根会議派 (AITC) のさらなる躍進と止まらない左翼戦線の後退

西ベンガル州はコルカタを擁する東部インドの中心であり、人口は 2011 年のセンサスでは 9128 万人であった (表 3.1)<sup>(4)</sup>。都市人口比率も 31.9% とほかの東部諸州と比べて高く、SCs の比率は 23.5%、STs は 5.8%、識字率は 76.3% である。2001 年のセンサスではヒンドゥー教徒が 72.5%、ムスリムが 25.2% である。ムスリムと SCs の比率が相対的に高いことが特徴である。2013 年度の一人当たり SDP は 3 万 7511 ルピーであり、全インド平均には及ばないものの東部諸州のなかではやや高く、その 2004 年度からの平均年成長率も 5.8% で全インド平均と等しい。連邦下院議員定数は 42 議席であり、そのうち SCs の留保議席は 10、STs の留保議席は 2 である。

よく知られているように、西ベンガル州では、インド共産党 (マルクス主義) (CPI (M)) が主導する左翼戦線が長らく政権を担当してきた。左翼戦線は 2000 年に自由化政策路線に転じた後も、2004 年の連邦下院選挙、2006 年の州議会選挙と勝利し、おおむね支持されていたが、州政権が進めようとしたタタ

表 3.5 西ベンガル州の連邦下院選挙結果

連邦下院選挙結果 (定数 42)	1999		2004		2009		2014	
有権者数 (人)	47,649,856		47,437,431		52,420,609		62,833,128	
投票率 (%)	75.1		78.0		80.7		82.2	
	議席数	得票率 (%)	議席数	得票率 (%)	議席数	得票率 (%)	議席数	得票率 (%)
会議派	3	13.3	6	14.6	6	13.5	4	9.6
全インド草の根会議派 (AITC)	8	26.0	1	21.0	19	31.2	34	39.3
BJP	2	11.1	0	8.1	1	6.1	2	16.8
インド共産党 (マルクス主義) (CPI (M))	21	35.6	26	38.6	9	33.1	2	22.7
インド共産党 (CPI)	3	3.5	3	4.0	2	3.6	0	2.3
革命社会党 (RSP)	3	4.3	3	4.5	2	3.6	0	2.4
前衛党	2	3.5	3	3.7	2	3.0	0	2.1

(出所) Election Commission of Indiaウェブサイトのデータ、井上 (2006) および上田ほか (2011) を参照して作成。

自動車の工場用地 (シングル) とインドネシア系財閥の経済特区 (ナンディグラム) のための土地収用問題が紛糾して、ママタ・バナジー率いるAITCが州政府批判の先鋒に立ち、支持を広げた。AITCは会議派と選挙協力し2009年の連邦下院選挙で躍進し、さらに2011年の州議会選挙で294議席のうち184議席を獲得し圧勝した。選挙前に176議席をもっていたCPI (M) は40議席を得るのみと大敗して、左翼戦線による州政府運営は終止符を打っていた。また、2012年に、外資規制緩和を進めようとするUPA政権の政策に反対するAITCは、会議派率いるUPA政権から離脱して、会議派との選挙協力も解消していた。

それゆえ今回の連邦下院選挙では、BJP、会議派、AITC、CPI (M) 率いる左翼戦線の4陣営が争う構図となった。また今回はAITCの州政府運営の評価が問われ、他党がこれに挑戦するという形にもなっていた。これまで西ベンガル州ではプレゼンスの低かったBJPもモディ要因で支持を拡大するのか、選挙結果が注目されていた。

結果は、AITCが34議席を獲得し、前回と比較して議席数で15、得票率でおよそ8%ポイント伸ばして39.4%を得て大勝した。また、BJPは、議席数は2議席と1議席を積み増すにとどまったものの、投票率を前回の6.1%から16.8%に大幅に伸ばし、会議派を抜き第3位の票を得ており、躍進といえる。これに対し、CPI (M) は得票率こそAITCに次ぐ22.7%を得たものの、前回からおよそ10.4%ポイント減らし、獲得議席も9議席から2議席に後退して大敗した。

会議派の得票率は前回から3.9%ポイント減り9.6%となり、議席も6から4に後退した。得票傾向をみると、左翼戦線を支持してきた社会的弱者層や貧困層の票がAITCに向かい、また西ベンガル州では少なくない比率をもつムスリム票もモディ批判を展開したバナジー州首相のAITCが引きつけていた。得票率を伸ばしたBJPは上位カーストに加え若年層とくに初めて投票権を得た層の支持を得た。バナジーはおそらく中央では過半数をとる政党はなく連立政権となり、そこで自党の躍進を梃子にして中央政府への影響力をもつ構想であったと推測される。AITCは西ベンガル州では大勝したものの、BJPが連邦下院で単独過半数を得てそのような目算は崩れた。また、西ベンガル州という観点から重要なことは、近年まで左翼戦線の牙城であった同州において、今回の選挙でAITCに加えて、BJPが勢力を増す結果となり、州与党のAITCに対する野党としての地位すら左翼戦線は危うい状況になったという州の政治状況の変貌ぶりである。AITCとBJPは、支持層が重複しており、経済の状況次第ではBJPがこれまで浸透し得なかった西ベンガル州で今後さらに支持を拡大する可能性もある。

## 5. アッサム州：BJPの伸長

紅茶の生産で有名なアッサム州は、2011年のセンサスでは人口は3121万人であり、都市人口比率は14.1%と低く、SCs比率は7.2%、STs比率は12.4%、識字率は72.2%である（表3.1）<sup>(5)</sup>。アッサム人ヒンドゥー教徒が過半数を占めるが、歴史的にプランテーションが重要な産業であったために州外からの移民や出稼ぎ労働者も多く、バングラデシュ、ネパールからの多くの外国人移民や不法滞在者を抱えていることもこの州の特徴である。同州の連邦下院議員定数は14であり、そのうちSCsの留保議席は1、STsへの留保議席は2である。2013年度の一人当たりSDPは、2万4533と東部諸州のなかでもっとも低く、またその2004年度からの年平均成長率も4.3%と全インド平均を大幅に下回っている。

現在、アッサムの州政権は2001年よりタルン・ゴゴイ州首相率いる会議派が担当しており、歴史的にも会議派が与党であった時代が長い。ただし、外

国人追放運動が1980年代に盛んとなり、この運動からアッサム人民評議会（AGP）が結党され州政権を1985年から1991年まで、1996年から2001年まで担うなど、1990年代は会議派とAGPが主要な政党であった。また、BJPは、1990年代後半からAGP以上に移民に対する強硬な姿勢を喧伝して支持を次第に広げていた。それでも、州政権を担う会議派は2004年連邦下院選挙時には全14議席のうち9議席、2009年時には7議席を獲得した。ただし、バドゥルディン・アジマルが率いる全インド統一民主戦線（以前の名称はアッサム統一民主戦線）は会議派の票、とくにムスリム票を奪って伸びてきていた。同党は、移民の権利保護に厚いといわれる不法移民（審判所決定）法（1983）<sup>(6)</sup>を最高裁が2005年に破棄したときに、会議派がこの破棄が起こることを阻止する努力をしなかったとして会議派と袂を分かって創設された党であり、中央のUPAの友党であったが、会議派が与党である州政府では主要な野党であり、2009年連邦下院選挙時に1議席を獲得した。また2009年選挙時には、BJPとAGPは選挙協力して、AGPは議席を2から1に減らしたものの、BJPは2から4議席に伸ばしていた。

今回の選挙では、ゴゴイ州首相率いる会議派州政権は楽観的であり、モディ・マジックはアッサムでは効かないと述べていた。その背景には、2011年の州議会選挙で、会議派は全126議席のうち、2006年の53議席から25議席積み増して、78議席を獲得していたことがある。BJPはグジャラート・モデルや反腐敗といった主張がアッサム州ではあまり票を掘り出さないとみなし、若者の職がムスリム・バングラデシュ人に奪われていると訴え、1971年以降の不法移民（ただしヒンドゥー・バングラデシュ人は別）を一掃するとモディが演説するなど、ヒンドゥー主義と反不法移民を前面に押し出した選挙戦となった。なお、今回はBJPとAGPは選挙協力に失敗した。そのほかボド族の自治運動も重要である。

選挙結果は、BJPが得票率をおよそ20%ポイント伸ばし、協力党なしに全14議席のうち7議席を獲得した。投票率が79.9%と高かったことも今回の選挙の特徴である。会議派は得票率を5%ポイント減らし、議席も7議席から3議席に後退した。その友党であるボド人民戦線も議席を失った。そのほか、AGPは得票率を3.8%にまで10%ポイント以上減らし1議席も獲得できず、反・反移民を掲げる全インド統一民主戦線は得票率を若干減らしながら

表 3.6 アッサムの連邦下院選挙結果

連邦下院選挙結果 (定数 14)	1999		2004		2009		2014	
有権者数 (人)	14,290,673		15,014,874		17,470,329		18,885,274	
投票率 (%)	71.2		69.1		69.5		79.9	
	議席数	得票率 (%)	議席数	得票率 (%)	議席数	得票率 (%)	議席数	得票率 (%)
会議派	10	38.4	9	35.1	7	34.5	3	29.9
BJP	2	29.8	2	22.9	4	16.2	7	36.5
アッサム人民評議会 (AGP)	0	11.9	2	19.9	1	14.6	0	3.8
全インド統一民主戦線 (旧アッサム統一民主戦線)	-	-	-	-	1	16.1	3	14.6
ボドランド人民戦線	-	-	-	-	1	5.4	0	2.2
その他	2	-	1	-	0	-	1	-

(出所) Election Commission of Indiaウェブサイトのデータ、木村ほか (2006) および上田ほか (2011) を参照して作成。

も議席を3に伸ばした。州政権を担う会議派としては惨敗と考えられる。BJPが優勢となった要因としては、反移民を掲げてきたAGPの指導者層がBJPに移り、また選挙期間中、モディが複数回アッサムを訪問して反移民を訴えるなど、AGPの支持層や会議派を支持してきたヒンドゥーのプランテーション労働者の支持層を取り込んだこと、ムスリムの票が会議派と全インド統一民主戦線に割れたことなどが挙げられる。ただし、今回の選挙がアッサムにおける宗派間対立の根を深くしてしまった可能性を視野に入れておく必要があるだろう。

## 6. 北東諸州

連邦下院の議席は、アッサム以外の北東諸州では、メガラヤ、アルナーチャル・プラデーシュ、トリプラ、マニプルはそれぞれ2議席、ナガランド、ミゾラム、シッキムはそれぞれ1議席で合計11議席ある<sup>(7)</sup>。この11議席のうち2009年選挙では会議派が6議席、CPI (M) が2議席、ナショナルリスト会議派党 (NCP) が1議席、ナガランド人民戦線が1議席、シッキム民主戦線が1議席という結果であり、BJP自体は1議席ももっていなかった。

今回の選挙では、BJPは上述したようにアッサムで躍進しており、隣接するアルナーチャル・プラデーシュでも1議席を獲得した。そのほかBJPの友党であるナガランド人民戦線、国家人民党 (NPP) がそれぞれ1議席を得て、残り

表 3.7 北東諸州（アッサムを除く）の基礎情報

	人口 (人)	一人当たり SDP (2012年度) (ルピー)	一人当たり SDP年平均 成長率(2004 ~2012年 度)(%)	都市人口 比率 (%)	指定カースト (SCs)比率 (%)	指定部族 (STs) 比率 (%)	識字率 (%)	男性 (%)	女性 (%)
シッキム	610,577	75,137	13.8	25.2	4.6	33.8	81.4	86.6	75.6
アルナーチャル・プラデーシュ	1,383,727	37,051	4.2	22.9	-	68.8	65.4	72.6	57.7
ナガランド	1,978,502	46,889	5.5	28.9	-	86.5	79.6	82.8	76.1
マニプル	2,570,390	23,996	3.2	32.5	3.8	35.1	79.2	86.1	72.4
ミゾラム	1,097,206	40,930	6.5	52.1	0.1	94.4	91.3	93.3	89.3
トリプラ	3,673,917	42,315	7.1	26.2	17.8	31.8	87.2	91.5	82.7
メガラヤ	2,966,889	38,627	6.1	20.1	0.6	86.1	74.4	76.0	72.9
全インド・全インド平均	1,210,569,573	38,856	6.1	31.2	16.6	8.6	73.0	80.9	64.6

(出所) 表 3.1 と同じ。

(注) 表 3.1 と同じ。

8 議席は会議派 5 議席, CPI (M) 2 議席, シッキム民主戦線 1 議席という結果となった。

**アルナーチャル・プラデーシュ：会議派 1 議席を維持したものの BJP が 1 議席を奪取**

中国との国境紛争地区を抱えるアルナーチャル・プラデーシュ州の人口は、2011 年のセンサスでは 138 万人であり、STs は 68.8%，2012 年度の一人当たり SDP は 3 万 7051 ルピーであった（表 3.7）。2 議席が争われたアルナーチャル・プラデーシュでは、州議会 60 議席も同時に選挙となった。事故死したドルジェ・カンドゥの後を受けて 2011 年に州首相となっていたナバム・ツキを首班とする会議派の州政権が州議会選挙を前倒しにして同時に実施したためである。連邦下院選挙については会議派が 2 議席を独占していたが、今回 BJP がそのうちアルナーチャル西選挙区の 1 議席を、16.9 万票を得て奪取した。次点の会議派候補者は 12.8 万票であった。会議派候補が 11.8 万票を得て勝利したアルナーチャル東選挙区においても次点の BJP 候補とは 1.2 万票あまりと僅差であり、BJP は同州で躍進したといえる。実際、得票率でみると、BJP が 8.9%ポイント伸ばしたのに対し、会議派は 9.9%ポイント減らし、BJP の得票率 46.1%は会議派の 41.2%を上回っている（表 3.8）。アルナーチャル・プラデーシュではモディ・ウエーヴが到達していたと考えられる。州議会選挙については議席 60 のうち、与党会議派は前回 2009 年の州議会選挙と同じく 42 議席を獲得して安定

表 3.8 北東諸州（アッサム）

		2009		2014	
アルナーチャル・ プラデーシュ（定数 2）	有権者数（人）	734,541		759,387	
	投票率（%）	65.3		78.6	
		議席数	得票率（%）	議席数	得票率（%）
	BJP	0	37.2	1	46.1
	会議派	2	51.1	1	41.2
ナガランド（定数 1）	有権者数（人）	1,321,878		1,182,948	
	投票率（%）	90.0		87.8	
		議席数	得票率（%）	議席数	得票率（%）
	ナガランド人民戦線	1	70.0	1	68.7
	会議派	0	29.4	0	30.1
マニプル（定数 2）	有権者数（人）	1,735,982		1,774,325	
	投票率（%）	77.2		79.6	
		議席数	得票率（%）	議席数	得票率（%）
	会議派	2	43.0	2	41.7
	ナガランド人民戦線	-	-	0	19.9
	インド共産党（CPI）	0	14.9	0	14.0
	BJP	0	9.5	0	11.9
ミゾラム（定数 1）	有権者数（人）	629,374		702,170	
	投票率（%）	51.8		61.7	
		議席数	得票率（%）	議席数	得票率（%）
	会議派	1	65.6	1	48.6
	無所属	0	32.2	0	47.2

（出所） Election Commission of India ウェブサイトのデータより作成。

多数を得たが、BJPも 3 議席から 11 議席に躍進した。それでも会議派州政権の同時選挙戦術は、州議会選挙については準備不足であったBJPのこれ以上の伸長を阻止したともいえる。

#### ナガランド：BJPに近いナガランド人民戦線が 1 議席を維持

ナガランドは 2011 年には人口 198 万人、STs比率は 86.5%である（表 3.7）。一人当たりSDPは 2012 年度には 4 万 6889 ルピーであった。ナガ系民族の人々はインドからの独立運動を展開し、1990 年代までは選挙のボイコットもたびたび行われてきた歴史がある。2003 年に、会議派から分かれて結成されたナ

## を除く)の連邦下院選挙結果

		2009		2014	
シッキム (定数1)	有権者数 (人)	300,584		370,611	
	投票率 (%)	83.8		83.4	
		議席数	得票率 (%)	議席数	得票率 (%)
	シッキム民主戦線	1	63.3	1	53.0
	シッキム革命戦線	-	-	0	39.5
	BJP	0	1.8	0	2.4
	会議派	0	29.6	0	2.3
メガラヤ (定数2)	有権者数 (人)	1,277,739		1,567,241	
	投票率 (%)	64.4		68.8	
		議席数	得票率 (%)	議席数	得票率 (%)
	会議派	1	44.8	1	37.9
	国家人民党 (NPP)	-	-	1	22.2
	統一民主党	0	15.1	0	9.9
	BJP	-	-	0	8.9
	ナショナリスト会議派党 (NCP)	1	18.8	-	-
トリプラ (定数2)	有権者数 (人)	2,082,206		2,388,819	
	投票率 (%)	84.5		84.7	
		議席数	得票率 (%)	議席数	得票率 (%)
	インド共産党 (マルクス主義) (CPI (M))	2	61.7	2	64.0
	会議派	0	30.8	0	15.2
	全インド草の根会議派 (AITC)	0	0.6	0	9.6
	BJP	0	3.4	0	5.7

ガランド人民戦線が主導するナガランド民主連合が会議派から政権を奪取して以来、中央の会議派率いるUPA政権が2009年連邦下院選挙時には大統領統治を敷いたものの、同州の連邦下院の1議席はナガランド人民戦線が獲得してきた。また、2009年の州議会選挙ではナガランド人民戦線が60議席のうち38議席を獲得しており、今回は、州首相を務めているニフィウ・リオ自身が首相職を辞してナガランド人民戦線の連邦下院議員候補となった。ナガランド人民戦線はBJPが主導するNDAに参加しており、BJPとは近い関係にある。今回もナガランド人民戦線がおよそ7割の票を得て会議派候補を破り、議席を獲得した(表3.8)。



メガラヤ：会議派が1議席、国家人民党（NPP）が1議席

2011年センサスによると、メガラヤの人口は297万人、そのうちSTsは86.1%である（表3.7）。歴史的に会議派の地盤であるが、州会議派内の権力闘争があり、不安定な状況が続いている。D.D.ラパンが2010年に辞任したのち、ムクル・サングマが州首相に就任し、2013年の州議会選挙では60議席のうち会議派が29議席を獲得して第1党を維持している。会議派の連邦下院議員を長らく務め州首相の経験もあったプルノ・サングマは2008年に、会議派から独立したNCPの州議員になり、その娘のアガタ・サングマがNCPから連邦下院議員となっていたが、今回プルノは国政選挙に復帰すべく、2013年に新しく結党したNPPから出馬した。プルノはBJP率いるNPAと同盟を組むと明言している。選挙結果は、シロン選挙区では無所属の候補者やBJPの候補者の挑戦を受けた会議派現職が20.9万票を得て次点（無所属候補）に4万票あまり差をつけて1議席を維持し、トゥラ選挙区ではプルノが23.9万票を獲得し20.0万票を得た会議派候補を退けNPPに1議席をもたらし（表3.8）。メガラヤにおいても、政党というよりも、サングマ一族など個々の政治家の動向が依然として重要である。

シッキム：シッキム民主戦線が1議席を維持

人口61万人のシッキムは観光業や中国チベット地方との国境貿易が好調で、一人当たりSDPは7万5137ルピーと全インド平均の2倍あまり、その2004年度から2012年度までの成長率は13.8%であった（表3.7）。STs比率はインド平均よりも高いものの、北東諸州のなかでは少ない。2001年のセンサスでは、ネパール系がおよそ75%を占め、宗教ではヒンドゥーが61%、仏教徒が28%などとなっている。1979年から1994年まで州首相の座にあったシッキム闘争会議のN.B.バンダラーイー、1994年から州首相を務めるシッキム民主戦線のパワン・チャムリンが長らく有力な政治家であったが、今回はシッキム民主戦線に対する挑戦が新たに結党されたシッキム革命戦線により行われるという構図であった。同党を結成した中心人物は、チャムリンのナンバー2であり、2013年にシッキム民主戦線を脱退したP.S.ゴレイである。また、今回の連邦下院選挙は州議会選挙と同時選挙であった。2004年州議会選挙では全32議席のうち

31, 2009年の選挙では32議席すべて、シッキム民主戦線が獲得してきた。シッキム革命戦線は20年に及ぶチャムリンのいわば独裁を非難し、変化をスローガンにした。州議会選挙ではシッキム民主戦線が32議席のうち22議席を獲得して5期連続で勝利し、また連邦下院議員議席も16.4万票を得てシッキム民主戦線が維持した(表3.8)。シッキム革命戦線は都市部で票を伸ばし、連邦下院選挙でも議席は得られなかったものの12.2万票と善戦しており、また州議会では10議席を獲得した。他方で、会議派、BJPいずれの候補者も連邦下院選挙では得票数は1万票にみたなかった。経済的な成功があり、シッキム民主戦線への支持は今のところ揺るがず、チャムリンは州首相に再任しその任期は1994年から20年あまりとなり、西ベンガル州首相を23年務めたジョティ・バサー(CPI(M))の記録に迫ることになる。

#### マニプル：会議派が2議席を維持

マニプルの人口は257万人、STs比率は35.1%である(2011年, 表3.7)。一人当たりSDPは2012年度には2万3996ルピー、その2004年度からの年平均成長率は3.2%と経済状況はインド平均を大きく下回り、北東諸州のなかでもいずれも最も低い。2012年の州議会選挙では全60議席のうち、2002年から州首相を務めるオクラム・イボビ・シン率いる会議派が42議席を獲得している。インパール周辺の平野部と山岳部のふたつの選挙区があり、後者はSTs選挙区である。ナガ系民族のナガランド州との統合要求も依然として争点のひとつである。会議派が2議席ともに現職をたて、得票率41.7%を得て2議席ともに獲得した(表3.8)。ただし、インナー・マニプル選挙区では会議派が次点のインド共産党に10万票近くの差をつけたが、アウター・マニプル選挙区では次点のナガランド人民戦線の候補者との差は1.5万票と僅差であった。BJPも2議席ともに争ったが伸びず、マニプルではモディ・ウェーヴは広がらなかった。

#### ミゾラム：現職会議派が1議席を維持

ミゾラムは人口110万人、STsは94.4%である(表3.7)。一人当たりSDPは2012年度には4万930ルピー、その2004年度からの年平均成長率は6.1%とおおむね全インドの平均と同じである。キリスト教徒が多いという特徴もある。独立をめざしたミゾ民族戦線が1986年に連邦政府と和平協定の合意に達

し1987年に州となったという経緯をもち、それ以来会議派とミゾ民族戦線の2党が同州の有力政党である。2008年に州首相に就任したラル・タンハウラの率いる会議派が2013年の州議会選挙でも全40議席のうち34議席を得て圧勝している状況であった。なお、その他6議席はミゾ民族戦線とその同盟党である。今回の選挙では、現職会議派のベテラン政治家C.L.ルアラ、ミゾ民族戦線などが擁立した候補者R.R.ロイテ（無所属として出馬）、そして庶民党の候補者が1議席を争った。会議派は焼畑農業をやめさせ、雇用を創出することを謳う新土地政策を掲げて戦い48.6%、21.0万票を得て勝利したが次点（ロイテ）との差は1万票未満であった（表3.8）。

#### トリプラ：インド共産党（マルクス主義）が2議席を維持

バングラデシュと長い国境を接しているトリプラは、2011年センサスでは人口367万人であり、面積は比較的小さいものの人口はアッサムを除くと北東諸州のなかで最も多く、STsの比率は31.8%と北東州のなかでは少ない（表3.7）。2001年のセンサスでは85.6%がヒンドゥー教徒であり、次いでムスリムが8.0%、キリスト教徒、仏教徒がいずれもおよそ3%であった。2012年度の一人当たりSDPは4万2315ルピーであり、その2004年度からの年平均成長率は7.1%である。同州ではベンガル人の流入と定住がSTsの暮らす土地を侵食したため、ベンガル人難民の排斥運動がある。また、ベンガル人人口が多いこともあり、平和と開発をめざすCPI（M）率いる左翼戦線が強く、2013年の州議会選挙でも全60議席のうち50議席を得た（残り10議席は会議派）。州首相はCPI（M）のマニク・サルカルであり、1998年より州首相を連続して4期務めている。今回の連邦議会選挙でもCPI（M）がいずれの選挙区でも次点の会議派候補に50万票あまりの大差をつけて2議席を独占した（表3.8）。BJPもほとんど票を伸ばせなかった。

#### 【注】

- (1) 本節ではElection Commission of Indiaのウェブサイト掲載データ、アジア経済研究所（各年版）および各種新聞報道のほか、オディシャ州の選挙分析を行ったものとしておもに吉田（2001）、吉田（2006a）、上田ほか（2011）、Das（2014a; 2014b）、Mohanty and Ray（2014）を参照している。
- (2) 本節ではElection Commission of Indiaのウェブサイト掲載データ、アジア経済研究所

- (各年版) および各種新聞報道のほか、ジャーラカンド州の選挙分析を行ったものとしておもに吉田 (2006b), 上田ほか (2011), Dayal (2014), Mahaprashasta (2014) を参照している。
- (3) 本節ではElection Commission of Indiaのウェブサイト掲載データ, アジア経済研究所 (各年版) と各種新聞報道のほか, チャッティースガル州の選挙分析を行ったものとしておもに上田 (2006), 上田ほか (2011), Saxena (2014), Tripathi (2014) を参照している。
- (4) 本節ではElection Commission of Indiaのウェブサイト掲載データ, アジア経済研究所 (各年版) および各種新聞報道のほか, 西ベンガル州の選挙分析を行ったものとしておもに森 (2001a), 井上 (2006), 上田ほか (2011), Chatterjee and Basu (2014), Chattopadhyay (2014) を参照している。
- (5) 本節ではElection Commission of Indiaのウェブサイト掲載データ, アジア経済研究所 (各年版) と各種新聞報道のほか, アッサム州の選挙分析を行ったものとしておもに森 (2001b), 木村・峯島・詹 (2006), 上田ほか (2011), Sharma (2014), Talukdar (2014b) を参照している。
- (6) Illegal Migrants (Determination by Tribunals) Act (1983)。不法移民の認定と送還についてアッサム州のみに適用されていた法律である。一般にはThe Foreigners Act 1946 が適用される。なお, 同法が憲法違反であると最高裁に訴えた人物は全アッサム学生組合委員長からアッサム人民会議に入ったS.ソノワルであり, 2011年にBJPに移って, 今回の連邦下院選挙でも当選し, 青年問題およびスポーツ大臣に任命されている。
- (7) 本節ではElection Commission of Indiaのウェブサイト掲載データ, アジア経済研究所 (各年版) および各種新聞報道のほか, 北東諸州の選挙分析を行ったものとしておもに森 (2001b), 井上 (2001), 木村・峯島・詹 (2006), 峯島 (2006), 上田ほか (2011), Talukdar (2014a) を参照している。

## 〔参考文献〕

### <日本語文献>

- アジア経済研究所 各年版『アジア動向年報』アジア経済研究所。
- 井上恭子 2001.「シッキム州」広瀬崇子編『10億人の民主主義：インド全州，全政党の役割と第13回連邦下院選挙』御茶の水書房 241-243。
- 2006.「西ベンガル州：またも左翼戦線が圧勝」広瀬崇子・南埜猛・井上恭子編『インド民主主義の変容』明石書店 249-256。
- 上田知亮 2006.「チャッティースガル州：会議派不信とサンガ・パリワールの浸透」広瀬崇子・南埜猛・井上恭子編『インド民主主義の変容』明石書店 245-247。
- 上田知亮ほか 2011.「東部・北東部諸州の選挙分析」広瀬崇子・北川将之・三輪博樹編『インド民主主義の発展と現実』勁草書房 177-217。

- 木村真希子・峯島秀暢・詹彩鳳 2006.「北東諸州」広瀬崇子・南埜猛・井上恭子編『インド民主主義の変容』明石書店 257-274.
- 峯島秀暢 2006.「シッキム州：シッキム民主戦線の優位確定」広瀬崇子・南埜猛・井上恭子編『インド民主主義の変容』明石書店 275-276.
- 森日出樹 2001a.「西ベンガル州」広瀬崇子編『10億人の民主主義：インド全州，全政党の役割と第13回連邦下院選挙』御茶の水書房 211-225.
- 2001b.「北東諸州」広瀬崇子編『10億人の民主主義：インド全州，全政党の役割と第13回連邦下院選挙』御茶の水書房 227-239.
- 吉田修 2001.「オリッサ州：政治エリートの椅子取りゲームと経済後進州のグローバル化」広瀬崇子編『10億人の民主主義：インド全州，全政党の役割と第13回連邦下院選挙』御茶の水書房 257-268.
- 2006a.「オリッサ州：野党連合の『不戦敗』と中央の政治的動きを読み違えた選挙民」広瀬崇子・南埜猛・井上恭子編『インド民主主義の変容』明石書店 231-238.
- 2006b.「ジャールカンド州：新州分離の意味を問われたインド人民党」広瀬崇子・南埜猛・井上恭子編『インド民主主義の変容』明石書店 239-244.
- 広瀬崇子編 2001.『10億人の民主主義：インド全州，全政党の役割と第13回連邦下院選挙』御茶の水書房.
- 広瀬崇子・南埜猛・井上恭子編 2006.『インド民主主義の変容』明石書店.
- 広瀬崇子・北川将之・三輪博樹編 2011.『インド民主主義の発展と現実』勁草書房.

<外国語文献>

- Chatterjee, J. and S. Basu. 2014. “West Bengal: Mamata Holds on to Her Fortress.” *The Hindu*, June 30. (<http://www.thehindu.com/opinion/op-ed/west-bengal-mamata-holds-on-to-her-fortress/article6166220.ece>).
- Chattopadhyay, S. S. 2014. “West Bengal: Saffron Portents.” *Frontline*, May 16.
- Das P. 2014a. “Late Swing?” *Frontline*, May 16: 76-77.
- 2014b. “Conjurer of Odisha.” *Frontline*, June 13: 61-63.
- Dayal, H. 2014. “Jharkhand: Confirming the National Trend.” *The Hindu*, May 23. (<http://www.thehindu.com/opinion/op-ed/jharkhand-confirming-the-national-trend/article6037678.ece>).
- Mahaprashasta, A. A. 2014. “Jharkhand: Skirting Real Issues.” *Frontline*, May 16: 39-40.
- Mohanty, P. and P. Ray. 2014. “Odisha: Rise of One-Party Dominant State.” *The Hindu*, June 25. (<http://www.thehindu.com/opinion/op-ed/odisha-rise-of-oneparty-dominant-state/article6151761.ece>).
- Saxena, A. 2014. “In Chhattisgarh, BJP Builds on Success of 2009.” *The Hindu*, May 25. (<http://www.thehindu.com/news/national/in-chhattisgarh-bjp-builds-on-success-of-2009/article6045243.ece>).

- Sharma, D. P. 2014. "Assam: BJP's Entry in North East." *The Hindu*, June 25. (<http://www.thehindu.com/opinion/op-ed/assam-bjps-entry-in-north-east/article6151572.ece>).
- Talukdar, S. 2014a. "General Election/North-East: Head Start for the Congress." *Frontline*, April 18: 47-50.
- 2014b. "Assam: Targeting 'Outsiders'." *Frontline*, May 16: 81-82.
- Tripathi, P. S. 2014. "Chhattisgarh: BJP Upbeat." *Frontline*, April 18: 27-28.

<ウェブサイト>

Election Commission of India (<http://eci.nic.in/eci/eci.html>).